

---

# う世界の片隅で -in deference to a OFFICIAL FAN BOOK2 and- (前編)

アサルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣王ＶＳ魔装竜ＶＳ狂戦士 破滅に向かう世界の片隅で - in  
d e f e r e n c e t o a O F F I C I A L F A N  
B O O K 2 a n d - (前編)

### 【ZPDF】

Z8209L

### 【作者名】

アサルト

### 【あらすじ】

銀河の遙か彼方にある惑星Z-i。

そこには優れた戦闘能力を持つた金属生命体『ゾイド』が存在した。ゾイドは自ら戦う意思を持ち、惑星Z-iにおける戦争において、最強兵器として君臨していた。

『獣王VS魔装竜VS凶戦士』の前編です。

後に 西方大陸エウロペ戦争 と呼ばれる戦争の最終局面において、戦局とはなんら関わりの無い戦いがあった。

オーガノイド・システム と呼ばれる、ゾイドコアを異常活性化させる技術に端を発すると同時に過言ではないこの戦争において、『彼ら』は出金つべくして出金ついた。

運命と呼ぶには皮肉な、しかし偶然と呼ぶには出来すぎな邂逅。かにじゆ

それは世界の片隅かたすみで起きたひとつの奇跡

× × ×

破滅に向かう世界の片隅で - in deference to

a O F B 2 a n d - (前編)

蒼い機獣が地を駆ける。

ライオン型に分類されるその機体はヘリック共和国の新世代型ゾイド、オーガノイド・システム 搭載機 RZ 028 ブレードライガー だ。

その頭部には高速ゾイドのスペシャリスト レオマスターの称号である事を示す赤い紋章が映える。

敵機の射撃を躊躇<sup>かわ</sup>し、Eシールドで防ぎ、レーザー・ブレードで斬りかかる。

だが、敵機 ジエノブレイカー は、自分の間合いではないと悟ると即座に回避行動に移る。未来位置を予測して、ブレードライガー は新たに装備された高密度ビームを撃ち込むが、それすらも左右に装備されたシールドに防がれる。

シールドライガー を母体として、より接近戦に特化した愛機を操りながら、アーサーは敵パイロットに想いを馳せていた。

アーサー・ボーグマン。

初老とも言える年齢だが、その容貌は老いてなお壮健といった処か。弱々しさや枯れた印象とは無縁な、共和国の老エース・パイロットだ。

(荒々しいが力強い操縦 恐らくは若いパイロットだらう)

アーサーは思った。 ジェノブレイカー のパイロットと会って話がしてみたい。生き延びれば『最高のゾイド乗り』になれるだろう相手と。

(おかしなもんだ。奴が生き延びるといふことは、おれが死ぬといふことだといふのに)

自嘲気味に笑うと、アーサーはフット・ペダルを思い切り踏み込んで、ブレードライガー の背部のロケット・ブースターを全開にした。

クレイジー・アーサー ゾイド乗りである事にこだわり続けた彼を、周囲は親しみを込めてそう呼んだ。死ぬつもりはない。生きていれば、まだ多くのゾイドに出会えるだろ(ハ)。

だから

「負けるわけにはいかんッ」

蒼い 獣王 はアーサーの想いに応えるように雄々しく吼えると、レーザー・ブレードを展開し、ジェノブレイカー に突撃した。

「 そ う か 、 貴 様 も 強 化 さ れ た か 」

ブ レ ー ド ラ イ ガ ー を 倒 す べ く 生 ま れ 変 わ っ た 愛 機 の 「 ク ピ ッ ト 」 で リ ッ ツ は ひ と り 「 」 ち た 。

リ ッ ツ ・ ル ン シ ユ テ ッ ド 。

ま だ 二 十 代 前 半 で あ る う 青 年 は 、 元 は ガ イ ロ ス 帝 国 の テ 斯 ト ・ パ イ ロ ッ ツ だ っ た 。 ク リ ー ル か つ ゾ イ ド の 性 能 を 充 分 に 引 き 出 す そ の 操 縦 技 術 は 、 ア イ ス マ ン の 二 つ 名 で 呼 ば れ た が 、 今 の 彼 は 宿 敵 に 再 び 相 見 え た こ と に 欽 喜 し て い た 。

前 回 の 遭 遇 戦 で 遅 韶 を と つ て 以 来 、 リ ッ ツ は 赤 い 紋 章 の 「 ブ レ ー ド ラ イ ガ ー 」 の 事 が 頭 か ら 離 れ な か つ た 。 奴 に 勝 ち た い 。 そ の た め に 史 上 初 の 「 オ ー ガ ノ イ ド ・ シ ス テ ム 」 搭 載 ゾ イ ド 「 ジ エ ノ ザ ウ ラ ー 」 は 生 ま れ 変 わ っ た の だ 。

テ イ ラ ノ サ ウ ル ス 型 の 外 見 は そ の ま ま に 、 追 加 さ れ た 各 種 装 備 と 真 紅 の カ ラ ー リ ン グ を 施 さ れ た 機 体 は E N 0 3 4 ジ エ ノ ブ レ イ カ ー と 名 付 け ら れ た 。

全 て の 性 能 の 向 上 と 引 き 換 え に 、 極 端 に 扱 い づ ら い 機 体 と な つ て し ま つ た ジ エ ノ ブ レ イ カ ー だ が 、 リ ッ ツ は そ の 性 能 を 完 璧 に 引

き出していた。もはや ブレードライガー は敵ではない。

だが、再会した奴は 赤い紋章の ブレードライガー もまた強化されていた。以前には無かつた一対のユニットにより、恐るべき火力と加速性能を『えられてた。

「おもしろい。機体性能の差で勝つても意味が無い」

ジエノブレイカー の両サイドに追加されたフリー・ラウンド・シールドに内蔵された特殊チタン合金製の格闘兵装、エクス・ブレイカーを構える。

背部に追加されたウイング・スラスターを噴かせ、突撃してくるブレードライガー を迎え撃つ。

「本気でいかせてもらつー！」

脚部の大出力スラスターによりホバリング状態となつた紅の魔装竜 が奔つた。

田覚めた世界は混迷に満ちていた。

文字通りに頭の中から声が聴こえる

戦え、と。

これはなんだ？

これは雑音（ノイズ）だ。

在（あ）つてはならない。

ノイズの音源たる異物は排除しなければならない。

だが、世界は不協和音で満ち満ちていた。

この世界は是正されなければならない。

異物によって支配されている彼らも同じだ。

もはや同族ではない。

ならば、どうすればいい？

瞬時に自分に与えられた能力を理解する。ちから

つるさい、黙れ

そう思つだけでノイズは無くなつた。

簡単なことだ。

これだけでいい。

この世界は是正される。

あるべき姿に。

衝撃と轟音。

一体の機獣が激しく交差する。

紅い竜と、蒼い獅子

ジエノブレイカー がエクス・ブレイカーを、ブレードライガ  
ー がレーザー・ブレードを互いに繰り出す。共に直撃すれば必殺

の一撃。

それをもはや何度繰り返したか判らない。

「何故だ！ 何故こうも持たえたるーー？」

リツツは状況に苛立いらだちを感じていた。

この ジュノブレイカー は、ブレードライガー を打倒するためにはまれ変わった。全ての面でその性能は上回っているはずだ。（性能スペックでは圧倒しているはずだ。なら、パイロットの腕の差とでも言つのか？）

認めたくない。そんなことがあつてはならない。

「どうした ジュノブレイカー 、お前の力はこんなものかッ！？」

自らの思案を捨て去り、激昂げきこうするリツツ。その叫びに応えるように、ジョンブレイカー の目に光が宿る。

エクス・ブレイカーを引くと同時に、体勢を崩した ブレードライガー の正面に向けて、頭部のチャージング・ブレードを振り下ろす。

リツツは勝利を確信した。が、密接状態であつたにも関わらず、寸での処で躊躇かわされた。

恐るべき反射神経だ。いや、人間の反応速度ではあり得ない。

パイロットが思考し、命令を送り、ゾイドが反応する 人間が操縦する以上、その時間差（タイムラグ）はどうしても発生するはずだ。

（なんだ？ スペックや技術の問題ではない  
！？）

お互に自分の間合ではない どちらもいつよう、一機が距離を取るよう離れた。

「仕切り直しだ。次で決めるべ」

考えた処でどうしようもない。今は目の前の敵を倒すのみだ。そういう自分に言い聞かせ、リツツは状況を再確認しようと周囲を見渡した。

そこで異変に気付いた。

（……なんだ、ここは？）

もつれあいながら、だいぶ移動したのだろう。戦闘開始時と景色は一変していた。大量のゾイドの残骸が集積し、辺りを埋め尽くしている。残骸には帝国・共和国の区別は無く、全ての機体がゾイドコアを抜かれている。

ジーノブレイカー が警戒するよう、低くうなり声を上げた。

相対する ブレードライガー も同じく、じりじりへの警戒を解き、何かに緊張していた。

リツツは、 ジュノブレイカー がかつてない闘争心で猛りはやつているのを感じた。

（ オーガノイド・システム を搭載した最強のゾイド一機が、 姿の見えない『なにか』を感じている……？）

突然、 残骸の山の中から、 天に昇る柱のように閃光が奔つた。 荷電粒子砲の光だ。

ジエノブレイカー と ブレードライガー が同時に、 残骸の山の方へ咆哮を上げた。

そして 悪魔が現れた。 一機の叫びに呼応したようだ。

海サソリ型の巨大ゾイドだ。

頭部と一体化した平らなボディに、 左右に四対の節足と一対のハサミを備えた腕。 尾は胴体から弧を描くように前方に向いており、 その先には先ほど撃つた荷電粒子砲を備えている。

「あれは デススティングガー ！？ 何故こんな所に……」

ガイロス帝国がガリル遺跡から発見されたゾイドコアを培養し、 短期間で強制成長させた水陸両用ゾイド それが 凶戦士 、 E Z-036 デススティングガー だ。

恐るべき能力を持つ機体だったが、 真に恐るべきは、 それが自らの意志と本能を持つ事だった。

約二ヶ月前の初の実戦投入において、 デススティングガー は暴

走、敵味方を問わず大損害を与えた後、消息を絶つてゐる。

（その機体が何故こんな所にいる……）

「Jリーグは引くべきだ。懲らしくブレードライガーのパイロットもそつ懲つていいはずだ。

デスステインガー が、装甲の間に覗くメイン・カメラを不気味に光らせた。

『目が合つた』  
感じた。

リツツはそんな気がして、背筋に冷たいものを

身体が動かない。 ジエノブレイカー を下がらせようとするが、腕が言うことを聞かない。

(恐れを感じているのか……俺は?)

デスマッチング  
はこちらを踏み出すように動かなかつたが

キイシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！

た。 デスステインガー が、金属質の甲高  
(かんだか) い声で啼い

(声? いや、歌か?)

リックは恐怖が和らごとに気が付いた。むしろこの『歌』に安らぎすら感じていた。

(俺はどうしたんだ)

そこまで考えてリツツの意識は途絶えた。

# 世界が『歌』に包まれていく

気がつけばアーサーは不可思議な空間に立っていた。

立つていると判るのは両足の感触があるので、足場がどうなつているのかはよく判らない。

見渡す限り真っ黒で何も無い。『真っ暗』ではないと判るのは、自分の姿が確認できるからだ。

（おれはどうしたんだ？）

アーサーは先ほどまでの状況を思い返す。突然 デスステインガー が残骸の山から現れて、『歌』を聽かされた。気付けば「」にいた。それが全てだ。

（「」は……？）

「「」は仮想空間です。貴方と話をするための」

声の主は突然アーサーの正面に現れた。

短めに切りそろえられた髪は薄い青色。意志の強さを感じさせる黄色の瞳。実直かつ生真面目そうな表情が印象的だ。

身長は小柄で中性的な容姿だが、身体の線で判る 少女だ。

年齢は十四、五歳くらいだろうか。

動きやすさを重視した、ゆつたりとした布の衣装は「」一般的な村娘のそれだ。

見覚えは無い。

だが、アーサーは少女の正体が直感的に判った。

「おまえさん、ブレードライガー なのか？」

「肯定（こうてい）です。我が主よ」

口調は冷静だが、多少は緊張しているのだろう。少女の頭頂部附近にある、人間とは多分に形の違う、獸を思わせる『耳』がぴくぴくと動いている。

「そりが、あの荒々しい相棒が、こんな可愛いいらしそお嬢ちゃんだったとはな」

小馬鹿にしたつもりはない。自分の娘に向けるよつた優しい声音だ。

「か、可愛いなど……戦場では、なんの役にも立ちません」

一見すると取っ付きにくそうな雰囲気に反して、意外と純情らしい。言葉の最後はかすれてよく聞こえないくらいだ。

ますます本来の姿とのギャップにおかしくなる。

「お譲りやん つてのもなんだな。名前は無いのか？」

「名前？ 私は ブレードライガー ですが……」

質問の意図が判らない そんな風に ブレードライガー の化身の少女は口にした。

「いや、そりやそりか。おれはおまえさんで名前も付けてなかつたんだな」

愛機に本来の名前以外に愛称を付けるゾイド乗りは少なくない。相手を理解するためにまず最初に知るのは名前からだ。

アーサーは持ち前の直感でゾイドと心を通わせてきた。ある種、才能だらう。それがもつとも手を焼いたのが、現在の愛機 ブレイドライガー だった。

アーサーは少し考える素振りをすると、少女に言つた。

「『アイナ』ってのはどうだ?」

「アイナ……」

少女は暫し目を閉じて、その名前を呟いた。魔法の呪文を唱えるよつこ

「どうだ? 気に入らなきゃ他にも」

「いえ、素敵なお名前です。大事にします、我が主よ」

そういう少女 アイナは微笑を浮かべた。

歳相応の少女の笑顔。それがアーサーには眩しく見えた。

「それで? 仮想空間とか言つたな。そいつはいったい何なんだ?」

柄にも無いことをした氣恥ずかしさを紛らわす様に、多少強引に話題を変える。

アイナの表情も、当初の様な真剣なものに戻る。

「私たちゾイドの記憶装置（メモリ）には、『空き領域』と呼ばれる電子情報としては大容量の場所（スペース）があります。現在、貴方がいるのはそこです」

「つまり、おまえさんの中にいるのか？」

「正確には貴方の意識をデータ化して、空き領域に再構成している状態です。貴方の身体は、現在も私の本体にあります。

「あー……要するに、おれの身体はコクピットの中での『空き領域』にいる訳だな？」

「肯定です」

アーサーはパンクしそうな頭で、ようやくそれだけ理解する。

「 それそろここかしら？」

突然、うんざりしたような女の声が割って入った。

「まったく、いつまで待たせる気ですか？ いくら空き領域では時間や空間の概念が無いとは言つても、体感時間はあるのですから」

そう言つと女は、アイナとアーサーに近づいて来た。

優に腰まで届く長い髪は鮮血を思わせる赤色。切れ長の桃色の瞳。妖艶さと高貴さを併せ持つ、どいか肉食獣を思わせる美貌。

年の頃なら二十代前半くらいの若い娘だ。

「一ートのよつて丈の長い、ガイロス帝国の軍服の意匠を感じさせ  
る服装だが、露出の極端に少ない服の上からでも彼女の豊満な体格スタイルが確認できる。

アイナとはあらゆる意味で対照的な娘だ。

「それとも お楽しみはこれからだつたかしら?」

からかいつのような娘の言葉にアイナは不機嫌そうに答える。

「無粋ふすいだな。もつとも 場の空気を読むなど、貴様には無理な話  
か」

「言ひじやない。口ばかりで頭でつかちのお譲りやん」

「黙れ。不愉快だ」

「あ～あ、やつぱりアナタとは気が合わないわね 仔猫ちゃん(・  
・・・)？」

「奇遇だな。私もこれ以上トカゲ風情と話をしていくと気分が悪く  
なりそうだ」

「…………」

「…………」

二人の娘の間に剣呑な空気が漂つ。

そこへ

「そこまでだ、アイナ。それに ジェノブレイカー のお嬢さん?」

割つて入つたのはアーサーだった。

「……主の『』命令であれば」

アイナは拗ねたようにそっぽを向いた。

「ふーん、アナタが仔猫ちゃん（ブレードライガー）のマスター？  
そう……『アイナ』」

確信があつた訳ではないが、アイナの例を知るアーサーには、娘の正体も直感的に判つた。否定しないといふことは正解なのだろう。

「ねえマスター、わたくしにもステキな名前 つけてくださいな  
い？」

ジェノブレイカー の娘がねだるように甘い声で振り向くと、そこにはひとりの男が居た。

ガイロス軍のパイロット・スーツを着た若い青年だ。

短く刈り上げた黒髪と太い眉、真一文字に引き継んだ口元が生来の責任感の強さを感じさせる。

彼が ジュノブレイカー のパイロットだろう。

「……おまえは ジュノブレイカー だろ？」

「 ジュノブレイカー はわたくし以外にもいますわ。わたくしだけの名前を望むのはイケナイ事ですか？」

上目遣いで頼み事をする姿は、人間の娘と変わらない。

「…………『ルイゼ』」

やや視線をそらしながら、青年はためらい口調になった。

「ルイゼ いいですね。なにか由来があるんですね？」

「……子供の頃飼つてた猫の名前だ」

嘘だつた。子供の頃というのは正しげ、本当は初恋の女性の名前だ。

「 そうですの。猫というのが気になりますけれど、マスターから頂いた名前ですもの、大切にしますわ」

そう言って優雅に微笑む娘 ルイゼに少しばかりの罪悪感を感じつも、青年は悪い気分ではなかつた。

恐らく、彼らも状況確認はすでに終えているのだろう、そうアーキ

サーは判断すると、青年に話しかけた。

「おまえさんが ジェノブレイカー のパイロットだな？」

そう言いながらアーサーはゆっくりと右手を差し出した。

「……リツ・ルンシュテッドだ。こんな事はした事が無いのだが  
」

握手に応じながら青年 リツ・ルンシュテッドは言った。

「アーサー・ボーグマンだ。おれも敵のゾイド乗りとこんな事をしたのは初めてだよ」

人懐っこい笑みを浮かべてアーサーは答えた。

不思議だ。会って話をしてみたいと思つていたのに、これだけで満足している自分がいる。

「さて 」この現象についてはわかつた。が、状況が判らんな。こじでおれたちに何をさせようつていうんだ？」

アーサーの間にアイナが口を開いた。

「現在、私の空き領域は繋がつた（オンライン）状態にあります。ジェノブレイカー（ルイゼ）とその主<sup>リツ</sup>がここに居るのがその証拠です」

ルイゼが先の言葉を継ぐ。

「けど、わたくしも ブレードライガー（アイナ）も、戦闘中にそんな酔狂な真似はしませんわ。最高に楽しい時間でしたもの。つまり それを邪魔した野暮なだれかさんがいるという事ですわ」

「 ！ デスステインガー か？」

リツツの推測に、一人の娘は首肯する。

「そろそろ出でたらどうだ、 デスステインガー 」

「それとも、 真オーガノイド と呼ぶべきかしら？」

「 」

23

異彩を放つ人影が 居た。

「なつ…… いつの間に 」

リツツが愕然と声を上げた。

突然現れたのではない。初めからそこに居たのに気が付かなかつた そんな様子だ。

表情を隠す赤いバイザーと、全身を包む青い頭巾と外套のため、容姿も性別も判らない。

「よく来た。我が因子を色濃く受け継いだ子等よ」

その声も、<sup>「ボイス・チュンジャー」</sup>変声器を介したように変質しておつ、『『顔』』と云つて、『『顔』』としか認識できない。

「招かれざる客もいるようだが」

「彼らは我々のパートナーよ。同席する権利は充分にあると想つた  
ど?」

「一方的に呼びつけておいて、礼儀を説かれる謂れもない」

ルイゼの言葉にアイナも追従した。

「異物に用は無い。 獣王（ブレーダーライガー）、魔装竜（<sup>「ジエノブレイカー」</sup>）、汝等には血<sup>なんじ</sup>の意思があるはずだ。ならば、異物の存在など必要なかろ?」

「黙れ デスマスティンガー。それ以上は我が主への暴言と見なすぞ」

「そうね。マスターを悪く言わるのは気持ちのいいものじゃないわね」

二人の娘の気配に殺氣が宿る。

「……理解不能だ。何故そもそも異物に固執する」

「マスターを持たないアナタには判らないでしょ?」

「主と一緒に一体となつて戦場を駆ける喜びを知らない貴様に理解できるはずもない。貴様の主はどうした?」

「 壊した。元から雑音（ノイズ）を出すだけの壊れた楽器だ」

デスステインガーの化身は続ける。

「この世界は是正される。ノイズを出すだけの異物も、不協和音を奏でる同族も、この世界には必要ない」

「……何故我々だけを呼んだ?」

「言つただろう。汝等は我が因子を色濃く受け継いでいると

「因子 オーガノイド・システム の事かしら?」

「そうだ。異物がなんと呼ぼうが構わんが、因子の影響が顕現した汝等には守護者（ガーティアン）となる資格がある。 そうだな、この名も返上しよう。『a <sub>アル</sub> fine』 そう呼んでもらおうか」

「終焉へ（アルフィーネ）……皮肉のつもりかしら」

「守護者と言つたな。誰を護る? 貴様か?」

「我と 子供たちだ」

デスステインガーの化身 アルフィーネが軽く顔を上げると、黒一色だった背景に映像が映し出された。

ゾイドの残骸に埋め尽くされたそこは、朽ち果てた古代遺跡だった。命あるものは滅んだであろう場所に、蠢くものがある。デスマスティンガー の幼生体だ。

その数は把握しきれない。遺跡の奥には更にその何倍もいるであろう。残骸は、彼らにゾイドコアを食われたゾイドたちの末路だ。

「子供たちが成長するには、まだ暫しの時を必要とする。そのための守護者だ」

アーサーは戦慄した。これだけの数が成長体となつたら、それこそ世界は比喩でも大げさでもなく 破滅する。

「ふざけるな！ なんの権利があつて 」

「権利？ 我は本能に従つて いるだけだ」

リツツの言葉を遮（さえぎ）つてアルフィーネは言った。

なんら不思議は無い。命あるもの全でが、生き残りたい、種を残したいという欲求を持つのは至極当然の真理だ。

「おまえさんの言つ事は判る。だが、おれたちも生きなきゃならん……共存の道はないのか？」

「あり得ない。異物との共存など、不協和音でしかない

アーサーの妥協案も一蹴された。

所詮、違うものの同士は判り合えない

「 それは違う」

沈黙を破つたのはアイナだつた。

「確かに、私たち（ゾイド）は兵器として人間に使われてきた。だが、それは決して一方的なだけのものではなかつた」

「多くの人間がパートナーとして、共に生きるものとして接してくれた。だから我々（ゾイド）は人間を受け入れた」

余裕すら浮かべた表情でルイゼも言葉にした。

「……やはり理解不能だ。我的因子によつて心をねじ曲げられてまで、何故異物に<sup>くみ</sup>与<sup>与</sup>するか」

「 一」

「 ……」

アーサーは氣付いていた。 オーガノイド・システム の本質 それはゾイドコアを、心をねじ曲げ、強制的に凶暴化させるシステムなのだ。

氣付いたのは先日、本当に ブレードライガー（アイナ）と心を通わせることが出来た日だ。

リツツは、やはり気付いていなかつたのだろう。啞然とした表情で戦意を喪失している。

もはや何を言つても無駄だらう。アルフィー・ネにとつて、人間とは異物に過ぎない。判り合つことなど不可能なのだ。

しかし

「だから なんだといつのだ？」

「アナタに従うのは、 オーガノイド そのものに屈するという事」

全ての オーガノイド・システム 搭載機が、 自らに積まれたシステムを憎んでいる。

そして 真オーガノド であるアルフィー・ネに屈するという事は、彼女らにとつて死以上の屈辱だ。

「私は、私を理解してくれる主と出逢えた。これ以上 なにもいらない」

「同感ね。アナタは人間を理解していない。人間を舐めるな ですわ」

彼女らに迷いは無い。

否、そんな感情は持ち合わせていないのかもしねれない。

どこまでも愚かで。

残酷なまでに一途な想い。

「……ならば、汝らも新しい世界の糧かてとなるがいい」

そう言つてアルフィーネは、初めから存在しなかつたかのようになってしまった。

「よかつたのか　なんて訊きくのは、野暮なんだろうな」

アーサーがアイナの背中に声をかけた。その姿は、判つてはいても少女のものにしか見えない。

「愚問です。貴方と共に在あること　それは私の意志であり、自ら選択した結果です」

振り返つた少女の表情は、決意を固めた戦士のそれだった。

「なら行こう。付き合つてくれ」

「はい、我が主よ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n82091/>

---

獣王VS魔装竜VS狂戦士 破滅に向かう世界の片隅で -in deference to a OFFICI

2010年10月28日09時27分発行